

第

2

章

キャリア教育推進のために



第1節 校内組織の整備

1 キャリア教育の推進と校長の役割

各学校における教育課程は、校長のリーダーシップのもと、全教職員が協力して編成していくものである。特に、キャリア教育は、生徒が行う全ての学習活動等が影響するため、学校の全ての教育活動を通して推進されなければならない。

また、キャリア教育は、目標及び育成する資質・能力、教育内容・方法等について、各学校が決定していかなければならないことから、校長はその教育的意義や教育課程における位置付けなどについての考えを全教職員に示し、実施に向けて「キャリア教育推進委員会」等の校内組織を整えていかなければならない。そして、全教職員が互いに連携を密にして、キャリア教育の指導計画の作成及び運用を図っていくよう導いていく必要がある。

さらに、キャリア教育では、校外の様々な人や施設、団体等からの支援が欠かせない。家庭の理解と協力も必要である。また、学習に必要な施設・設備、予算面については、設置者からの支援が欠かせない。このことから、校長は、自校のキャリア教育の目標や教育内容、実践状況について、学校便りやホームページ等により積極的に外部に情報発信し、広く協力を求めることが大切である。

各学校では校長の方針に基づき、キャリア教育の目標が達成できるように、全教職員が協力して全体計画を作成し、円滑に実践していく校内推進体制を整える必要がある。校内推進体制の整備に当たっては、全教職員が目標を共有しながら適切に役割を分担するとともに、教職員間及び校外の支援者とのコミュニケーションを密にして連携することを念頭に置くことが肝要である。

この項では、生徒に対する指導体制と実践を支える運営体制の二つの観点から、キャリア教育のための校内推進体制の在り方について述べることとする。

2 生徒に対する指導体制

キャリア教育にかかわる授業は、実際に指導を進めていく学級担任・ホームルーム担任が指導者となって進められることが多い。日ごろ、学級担任・ホームルーム担任は各教科・科目等の授業を通して生徒をよく理解しており、生徒の実態を生かしたり各教科・科目、総合的な学習(探究)の時間、特別活動と関連を図ったりして創意あふれる実践がしやすい立場にあり、これまでも数多くの優れた実践が展開されてきている。

一方、キャリア教育の学習が進む中で、生徒の問題の解決や体験的な活動の幅が広がったり多様化したりすることや、学習の追究が次々と深化・拡大することは、当然おこり得ることであり、学級担任・ホームルーム担任一人だけでは対応できない状況が出てくる。このような場合に、学年の教師集団が指導を分担する工夫も必要となる。また、学習内容によっては、他学年・学科の教師や養護教諭等の専門性を生かした学校全体の支援体制が必要になる。

このような複数の教職員による指導を可能にするには、時間割の工夫のほか、全教職員が自分の学級・ホームルームや学年・学科だけでなく、他の学級・ホームルームや学年・学科のキャリア教育の実施状況を十分把握しておくことが大切である。その意味で、学級担任・ホームルーム担任は、キャリア教育

の実施状況を様々な形で他の学級・ホームルームや学年・学科に公開する必要がある。例えば、日常の授業の公開のほか、生徒の学習活動の様子を校務支援システムで共有することなどは有効である。また、全教職員で実践状況を紹介し合い、互いに学び合うことなどを内容としたワークショップを行うことも、学校全体の学習状況の理解を深めると同時に、教職員の協同性を高めることにつながる。

3 実践を支える運営体制

キャリア教育では、生徒の問題解決や体験的な活動の広がりや深まりによって、複数の教師による指導や校外の支援者との協力的な指導が必要になる。また、教科書がない学習活動を展開する中で、指導内容や指導方法等をめぐって、指導する教師が気軽に相談できる仕組みを職員組織に位置付けておくことも求められる。さらに、指導に必要な施設・設備の調整や予算の配分や執行を行う役割も校内に必要である。このように、キャリア教育の特性から、校内に指導に当たる教師を支える体制を整える必要がある。

そこで、次に示す職員分担や組織運営を参考に、校長は各学校の実態に応じて校内規程を整備し、教師の実践を学校全体で支える仕組みを整える必要がある。

ア キャリア教育の実践を支える校内分担例

- | | |
|--------|-------------------------|
| ○教頭 | 運営体制の整備 校外の支援者 支援団体との渉外 |
| ○教務主任 | 各種計画の作成と評価 時間割の調整 |
| ○研修担当 | キャリア教育にかかわる研修の企画・運営 |
| ○学年主任 | 学年内の連絡・調整 研修 相談 |
| ○図書館担当 | 必要な図書整備 生徒の図書館活用支援 |
| ○機器担当 | 情報機器等の整備及び配当 |
| ○安全担当 | 学習活動時の安全確保 |
| ○養護教諭 | 学習活動時の健康管理 健康教育にかかわること |
| ○事務担当 | 予算の管理及び執行 |

イ キャリア教育推進委員会

キャリア教育の全体計画及び年間指導計画の実施や評価、各分担及び学年・学科間の連絡・調整、実践上の課題解決や改善等を図るため、関係教職員で組織する。

構成については学校の実態によって様々考えられるが、例えば、教頭、教務主任、研究担当、特別活動担当、学年・学科主任などが考えられる。協議内容によっては、図書館教育担当や養護教諭、情報教育担当等を加える場合もあろう。小規模校であれば、教頭、教務主任、研究担当、特別活動主任などから構成することが考えられる。

これらの関係教師間の連携強化のために連絡・調整を行うとともに、キャリア教育推進委員会の円滑な運営を図るほか、全体計画をはじめとする各種計画の作成・運用・評価についての調整、校外の支援者との連携のためにコーディネートの教師を置くことも有効である。

ウ 学年部会

キャリア教育は、学年ごとに共通テーマを設けたり年間指導計画を作成、実施したりしている学校が多い。異学年間で実践を行う場合も、学年の担当者を窓口で教師間連携が図られることが多い。このことから、学年部会は、キャリア教育の運営上の重要な役割をもつと言える。

学年部会は、学級・ホームルーム間の連絡・調整のみならず、指導計画の改善や実践に伴って次々と生まれる諸課題の解決や効果的な指導方法等について学び合うなど、研修の場としても大切な役割が期待される。

また、学年部会では、実践上の悩みや疑問が率直に出され、互いに自由な雰囲気でも話し合えるよう配慮することが大切である。そのことが、教師同士の協同性を高め、キャリア教育の改善のための日常的な営みを容易にしていく。

第2節 教職員の研修

キャリア教育を充実させ、その目標を達成する鍵をにぎるのは、指導する教師のカリキュラム編成やその運用能力、そして授業での指導力などである。さらに、地域や学校、生徒の実態に応じて、特色ある学習活動を生み出していく構想力も必要である。また、キャリア教育は、教師がチームを組んで互いに持ち味を発揮して指導に当たることによって、生徒の多様な学習状況に対応できるのであり、各学校では、教職員全体の指導力向上を図る必要がある。したがって、職員研修の中でもとりわけ校内研修を充実させることは、各学校にとって極めて重要である。

校内研修のねらいや内容は、各学校の職員構成や実践上の課題等に応じて適切に定めていくべきものであるが、まずは、本書を参考に、学校において定めるキャリア教育の目標、育成する資質・能力、キャリア教育の教育課程における位置付けや各教科・科目等との関連、全体計画、年間指導計画、単元の指導計画の作成及び評価等については、全教職員の認識を深めておく必要がある。また、研修内容は、できる限り実践を進める教師の希望や必要感を生かしたものにしていきたい。

なお、校内研修は全教師が一堂に会して実施する場合もあるが、学年・学科単位や課題別グループ単位等の少人数で、課題に応じて弾力的に、そして継続的に実施していくことも必要である。また、研修方法についても、講義形式のほか、ワークショップや事例研究、演習方式等、学校の実態や研修のねらいに応じて適切な方法を採用したい。

また、年間の研修計画には授業研究を位置付けるようにし、生徒の学習に取り組む姿を介して教師の指導や支援等について評価し、指導力の向上を図ることも必要である。

さらに、キャリア教育の全体計画、年間指導計画、実践記録、生徒の作品や作文等の写し、映像記録、参考文献等を、コーナーを決めて整理・保存し、いつでも検索できるようにしておくことも、職員研修の推進にとって有効である。

このようにして進める校内研修は、教師間の協同性を高める上でも極めて重要である。

一方、校長は校外で行われる研修会や研究会に積極的に職員を派遣し、その成果を自校に役立てることが大切である。また、近隣の学校同士で実践交流を行い、互いに学び合う機会を設けることも、実践力の向上に役立つ。



第3節 全体計画の作成

1 全体計画の基本的な考え方

キャリア教育は、一人一人のキャリアが多様な側面をもちながら発達していくことを改めて深く認識し、生徒がそれぞれの発達の段階に応じ、自己と働くこととを適切に関係付け、各発達の段階における発達課題を達成できるよう取組を展開するところに特質がある。そして、これらのキャリア発達を促進するためには、必要とされる諸能力を意図的、継続的に育成していく必要がある。

キャリア教育を体系的に推進していくために欠かせないものが全体計画である。全体計画とは、学校として、キャリア教育の基本的なあり方を内外に示すものである。全体計画を作成することで、学校の特色や重点、それに基づいた教育課程へのキャリア教育の位置付けを明確にすることができる。また、各教科・科目等におけるめざす姿や指導の重点を確認、共有することができる。

全体計画に盛り込むべきものとしては、以下に示すように、①必須の要件として詳細に記すもの、②基本的な内容や方針等を概括的に示すもの、③その他、各学校が自校の全体計画を示す上で必要と考えるものの3つがある。

① 必須の要件として詳細に記すもの

- ・各学校において定める目標
- ・育成すべき資質・能力
- ・教育内容・方法
- ・各教科・科目等との関連

② 基本的な内容や方針等を概括的に示すもの

- ・学習活動
- ・指導体制
- ・学習の評価

③ その他、各学校が全体計画を示す上で必要と考えるもの。

- ・教育目標
- ・年度の重点
- ・地域の実態
- ・学校の実態
- ・生徒の実態
- ・保護者の願い
- ・地域の願い
- ・教職員の願い
- ・地域との連携
- ・異校種との連携

2 身に付けさせたい資質・能力の設定

基礎的・汎用的能力の育成につながる指導方法や学習方法は限りなく存在し得る。だからこそ資質・能力、身に付けさせたい力の明確化が求められる。意図なく、計画なく「これも社会で重要」「これも将来は大事」と洗い出すだけでは、教師が各教科・科目等の目標を見失うだけでなく、生徒にとっても何を目指しているのかわからない、混乱した授業になってしまう。

学習指導要領では、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのか以下の三本柱を参考に明確にすることとしている。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

その具体的な設定について、中央教育審議会答申(平成28年)から読み解いてみる。

こうした枠組みを踏まえ、教育課程全体を通じてどのような資質・能力の育成を目指すのかは、各学校の学校教育目標等として具体化されることになる。(中略)特に「学びに向かう力・人間性等」については、各学校が生徒の姿や地域の実状を踏まえて、何をどのように重視するかなどの観点から明確化していくことが重要である。

資質・能力は各学校において具体化される。目の前の生徒の現状を見つめていただき、どんなことができる生徒にしたいのか、どんな力を身に付けた大人になってほしいのか、地域・社会の実情も踏まえて学校で明らかにしていくということである。

これまでもキャリア教育では、身に付けさせたい力である基礎的・汎用的能力について各校において具体的かつ焦点化して設定していただくことをお願いしてきた。生徒の「強み」と「弱み」を把握し、一定の期間を通じて具体的に「何ができる〇年生(卒業生)」にしたいのか基礎的・汎用的能力の視点で目標を設定し、それによってアウトカム評価を実施していくということである。



第4節 年間指導計画の作成

1 年間指導計画の基本的な考え方

学校教育全体で取り組むキャリア教育においては、系統的・組織的に指導するにあたっては、計画に基づき実施する必要がある。前項で述べられているように、キャリア教育の全体計画は、生徒のキャリア発達を促進するために、生徒に身に付けさせたい力を意図的、継続的に育成していくために、各学校における目標や育成する資質・能力、教育内容・方法、各教科・科目等との関連等を示すものである。それに対して、各学年における年間指導計画は、全体計画を具現化するものであり、その際、各発達の段階における資質・能力の到達目標を具体的に設定する。各教科・科目等の学習指導要領におけるキャリア教育に関する事項を確認し、相互の関連性や系統性を留意の上、有機的に関連づけ、発達の段階に応じた創意工夫ある教育活動を展開する必要がある。そして、これらの指導計画は各学校の教育課程に適切に位置づけられるものである。

2 年間指導計画・単元指導計画の作成

年間計画に盛り込まれる要素としては、学年・時期・予定時間・単元(題材)名・各単元(題材)における主な学習活動・評価などが考えられる。生徒の学習経験や発達の段階を考慮し、季節や学校行事などの活動時期を生かしたり、各教科・科目等との関連を見通したりして計画する。

(ア)年間指導計画作成の手順

年間指導計画作成上の手順を以下に示す。

- ① 各校の生徒の学年等に応じた資質・能力の目標を決定する。
- ② キャリア教育の全体計画で計画した各資質・能力の目標に基づき、各校の年間行事予定、学年別の年間指導計画に記載する内容を検討する。
- ③ 各教科・科目等、学年・学科、学級・ホームルームの取り組みを相互に関連付け、有機的に指導計画を作成する。
- ④ 各資質・能力の到達目標に応じた評価の観点を設定し、明確にする。

(イ)年間指導計画作成の留意点

年間指導計画を作成する上での留意点としては、各学校・生徒の実態並びに発達の段階に応じて目標や内容を検討する必要があることが挙げられる。各教科・科目等、学年・学科、学級・ホームルームの取り組み等の具体的な計画を体系的に作成し、それぞれのねらいや内容を踏まえた上で、関連づける。また、学習指導要領との関連を考慮した上で、評価の観点についても検討する必要がある。作成した各学校の計画については、教師・保護者・地域が共通理解を図り、連携していくことが大切である。

年間指導計画作成の留意点を以下に示す。

- 各校の生徒の実態や発達の段階に応じた目標設定、計画、内容にする。
- 各教科・科目等、学年・学科、学級・ホームルームの取り組み等、それぞれのねらいや内容を踏まえて関連づけを図る。
- 生徒のキャリア発達を支援するような具体的な計画を体系的に作成する。
- 各教科・科目等の学習指導要領との関連を図る。
- 評価の観点等を考慮し、評価の方法も検討する。
- 家庭・地域、学校間の連携を考慮する。

(ウ)年間指導計画作成の効果

年間指導計画を作成することで得られる効果としては、次の点があげられる。

- 学年別年間指導計画を作成することで、発達の段階に応じて学年を通じてキャリア発達を支援できる。
- 各発達の段階や学年に応じて身につけることが求められる諸資質・能力の到達目標が明確になる。
- 年間の学年・学科における活動がどのような資質・能力の形成を図ろうとするものか明確になる。
- 各教科・科目等、学年・学科、学級・ホームルームの取り組みがどのように有機的に関連づけられているか明確になる。

3 キャリア教育を進める際の留意点

キャリア教育において体験活動は重要であり、学びの核と言える。体験活動は、今の学びや努力が何につながるのか、体感する絶好の機会と言える。しかし、その機会を生かすためには、体験活動がやりっ放し、イベントの乱立にならないように事前・事後指導の充実こそが重要である。

安全に体験活動に取り組むための活動や礼法講座、連絡調整、感想文やお礼状の指導はもちろん重要だが、これは、体験活動の直近、いわば「直前・直後の学習」である。入学から卒業までの期間や学年1年間を単位とした教科・科目等の指導や学習や生活のルールに関する指導を有機的に体験活動につなぐ中・長期的な「事前・事後の学習」を大事にしたい。

社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力は、小学校から高等学校まで、発達の段階に応じて、学校の教育活動全体の中で育むものとされてきた。一方で、これまで学校の教育活動全体で行うとされてきたことが、逆に指導場면을曖昧にしまい、特に狭義の意味での「進路指導」との混同により、進路に関連する内容が存在しない小学校においては、体系的に行われてこなかったという課題もあった。そのため、何をやってもキャリア教育、何もしなくてもキャリア教育という問題が散見された。

繰り返しになるが、キャリア教育は生徒に身に付けさせたい資質・能力の育成に向けて、学校教育全体(教科横断、学年縦断)で取り組むものであるから、明確なゴール設定(全体計画の作成)と具体的な指導及び活動過程の明示(年間指導計画の作成)が不可欠となる。

第5節 学校，家庭，地域の連携・協働

1 キャリア教育における連携の経緯と基本的な考え方

接続答申以来，文部科学省では，平成17年度に産学官の連携による職場体験活動・インターンシップの推進のためのシステムづくりを目指した「キャリア教育実践プロジェクト」を開始し，中学校を中心に5日間の職場体験活動を推奨した「キャリア・スタート・ウィーク」事業をその中核に据えた。このモデルとなったのが，兵庫県内のすべての中学校で実施されていた5日間程度の社会体験活動「トライやる・ウィーク」である。

この「キャリア・スタート・ウィーク」事業において各都道府県や市町村区のモデル校及び地域では職場体験活動の推進や充実の実現はもとより，この活動を支えるために「知事(首長)部局と教育委員会」「商工会議所と校長会」「学校と地域(商店)」などの新たな連携・協働が進んだことも忘れてはならない。兵庫県や京都市にこの好例を見ることができる。これまでも地域素材を教材に取り入れたり，地域住民と交流したりする活動を重視してきた小学校においては，キャリア教育の推進により「学校支援地域本部」や「コミュニティースクール(学校運営協議会)」などの設置と関与が進み，「地域とともにある学校」づくりに推進力が生まれた。

中央教育審議会答申(平成28年)には社会とのつながりや，各学校の特色づくりに向けた課題を以下のようにしている。

また，学校教育に「外の風」，すなわち，変化する社会の動きを取り込み，世の中と結び付いた授業等を通じて，生徒たちがこれからの人生を前向きに考えていけるようにすることや，発達の段階に応じて積み重ねていく学びの中で，地域や社会と関わり，様々な職業に出会い，社会的・職業的自立に向けた学びを積み重ねていくことが，これからの学びの鍵となる。

しかし，「体験活動さえすればキャリア教育である」のような誤解が生じたことはこれまでも触れてきた通りである。社会に開かれた教育課程の編成も同様で，学校教育を社会に開くことはもちろん大切である。しかし，開くことが目的となる段階はすでに終えており，今は，生徒に身に付けさせたい資質・能力の育成に向けて必要だからこそ連携・協働する段階にある。

連携授業が教科横断型で持続可能なものになっている学校は，「なぜ連携・協働が必要なのか」を学校内外の関係者が答えられるようになっている。今日の厳しい社会のなかでも，活力ある地域の構築に奮闘する人との出会いの重要性を掲げている学校がある。「こんな仕事があるんだな，こんな役割があるんだな，こんなすごい人がいる地域なんだ」「この人がこんなに精力を傾げるだけの価値ある地域なんだ」と発見させたいと，家庭や地域社会との連携及び協働を進めている。

『商工会議所キャリア教育活動白書』(日本商工会議所，2019年)では，学校と企業のすれ違いが明らかになっている。よく学校からは「受け入れ先の開拓や連絡が難しい」と聞くと，この白書では全国の商工会議のうち外部からキャリア教育活動の依頼があった際の意向について「依頼があれば是非協力したい……3.4%」「依頼があれば可能な限り協力したい……72.4%」となっている。この結果からは，互い

に「むずかしいだろう」「迷惑だろう」と想像するあまり、直接的なコンタクトに至っていないことも予測される。「教育に貢献したい」「学校にかかわってみたい」と考える企業や団体、地域住民の思いを知ること、そして学校の思いや悩みを企業や団体、地域住民に知ってもらうことから「社会に開かれた教育課程」の編成は始まる。

しかし、学校は忙しく、時間の流れが企業や団体と異なることも事実である。一般的に生徒が学校にいる間に外部と連絡をとったり、調整したりすることは簡単ではない。さらには、メール等ICTの活用などにおいてもその環境差が大きいことは事実である。

そんな中で、各地の学校には学校と地域住民や外部人材をつなぎたいとその役割を買って出てくださいる方がいる。地域によっては、地域教育コーディネーターや学校支援コーディネーターと呼ばれており、経済産業省の支援により一定の講座を受講し、資格をもつキャリア教育コーディネーターも存在する。学習指導要領は、こういったコーディネーターと思いを共有し、協働することが、これからの学校教育の業務改善や働き方改革の大きな助けになると示している。

2 家庭・保護者との連携

かつての生徒は、保護者の働く姿を否応なしに目にし、そこから多くのことを学んでいた。しかし、昨今、社会の変化が目まぐるしく、核家族化や価値観の多様化等で、家庭生活も変わってきている。家事の合理化、外部化により、生徒たちが家事などの仕事を果たす経験も少なくなり、親子の会話も少なくなっている。ましてや親の働く姿や祖母や祖父から引き継がれた仕事などに接する機会がなくなっているのが現状である。

家庭は、生徒の成長・発達を支える重要な場であり、様々な職業生活の実際や仕事には困難もあるが大きなやりがいもあることを、有形無形のうちに感じとらせることが重要である。同時に保護者が学校の取組を理解し、学校と一体となって生徒たちの成長・発達を支えていくことが今後ますます強く求められる。

家庭教育の在り方、働くことに対する保護者の考え方や態度は、生徒の人格形成や心身の発達に大きな影響を及ぼすものである。また、キャリア教育は、生活基盤である地域や周囲の大人、社会や産業等とのかかわり無しには考えることはできない。生徒たちは、家庭や地域での人間関係や生活体験を通して、社会性を身に付け、「生き方」の基礎を培っていくのである。

キャリア教育について保護者の理解を得ることは非常に重要である。学校公開や保護者集会、学校だよりなどを通して、学校のキャリア教育の方針や指導内容について理解を深めるよう工夫するとともに、キャリア教育の支援者として共に活動する場を提供したいものである。

3 地域や働く人との連携

一方、地域社会は、本来、生徒が同年齢、異年齢の人たちと、協働、参画できる場のはずである。また、生徒が地域社会の中で、多様な人間関係を体験することができる場でもある。「生徒は地域の宝」ともいわれ、地域社会で生徒を育てていこうという機運が高まりつつある中で、大人も含め、生涯学習の観点からも、地域社会でキャリア教育を進めていくことが求められている。しかしながら、生徒にとって地域は、住んでいる場所、学校のある場所の役割しか果たしていないとの指摘もある。今後は、家庭・地域がそれぞれの役割を認識し、生徒の家庭での生活、地域での活動の在り方を考え、キャリア発達を

はぐくむ連携システムを構築していく必要がある。

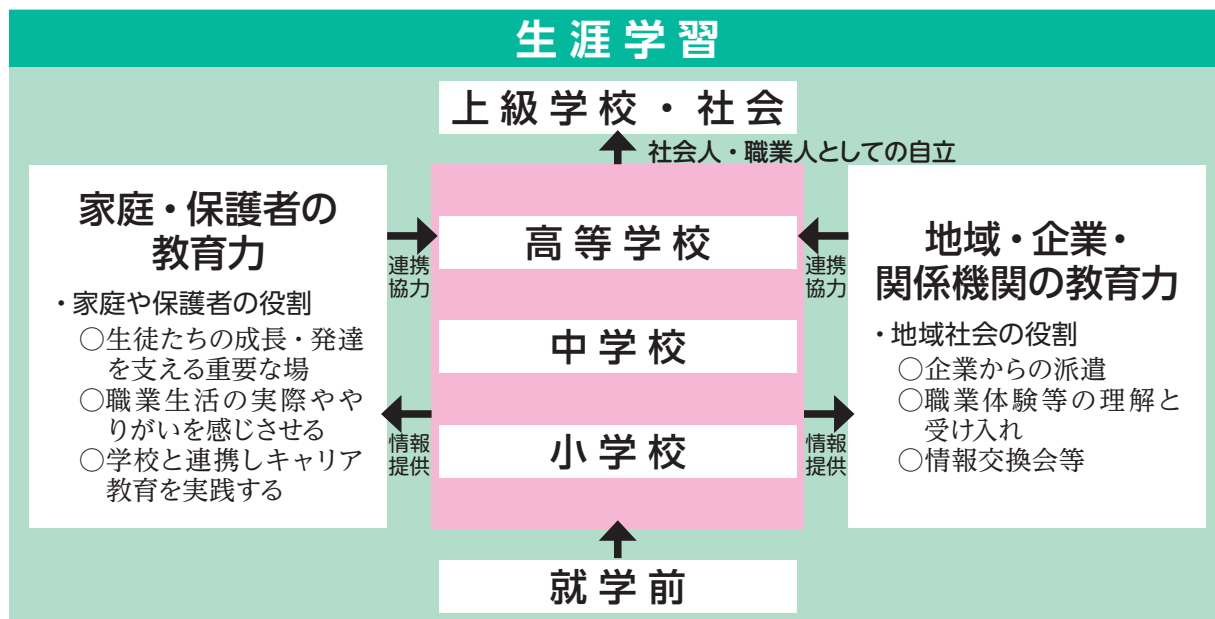
また、企業・産業界には、本物に触れさせる体験を通して、生徒の知的好奇心を醸成し、学習意欲を高め、将来就きたい仕事へのあこがれを強くさせていくことなどが求められる。生徒にとって、企業を訪問したり、職場で体験したりすることは、社会を味わうことのできる1つの教室であり、先生であり、教科書である。このような活動から生徒は、自分たちの生活と職業との関係を考え、職業に対する基礎的な知識・理解を得ることになる。企業・産業界には、このような場の提供や生徒を社会の一員として大人に育てていくことができる教育力が求められている。そのためには、教育における役割や学校の取組を理解する必要があり、生徒に、多様な人とのかかわりを経験させ、コミュニケーション能力を育むと同時に、仕事をしている人と話すことで、仕事に必要な資質や能力などを知る機会をつくるなど、キャリア発達能力を促す上で社会との関わりを大切に、連携を図る必要がある。

4 学校間(異校種間)連携

キャリア教育において「学校間の円滑な連携」「接続の問題」が取り上げられている。社会の変化に対応するために、新しい内容を含んだ授業が、学校個々の個性に応じて創られようとする時代に、生徒にとっての時系列を無視することはできない。一人の人間の成長を考えたとき、幼稚園から小学校、小学校から中学校、高等学校への移行には、連続性があり、キャリア教育上の連携は、必要不可欠である。従来から学校間連携の課題として、「児童生徒個々のもつ情報の移行」や「教え方や接し方のギャップ」等から起こるとされる進学時の不適応など見過ごすことのできない問題を引き起こしている。学校間の連携は、このような課題を解決する意味においても不可欠なものである。

幼稚園・小学校・中学校・高等学校それぞれの特徴を理解した上で、児童生徒の将来を共に見据え、教育の中に具体化しようと、互いに協力しながら連携することが重要である。

【小学校・中学校・高等学校の連携と家庭・地域との連携】



第6節 評価

1 評価の基本的な考え方

キャリア教育においても、各学校の目標及び育成する資質・能力、教育内容・方法等との関係から、生徒にどのような力が身に付いたのかを明確にするためにも、適切な評価をすることが必要である。また、キャリア教育の評価は、各学校で適切に観点を定め、これに基づいて生徒の学習をよりよく改善するために評価するものであることは確認しておく必要がある。さらには、キャリア教育に関する学習が、各教科・科目等の学習の目標をよりよく達成し、主体的に学ぼうとする意欲の向上に結び付き、教科等の学習がキャリア教育に関する学習の関心や意欲につながるという相互関係についても理解しておく必要がある。

キャリア教育の評価は、生徒の学習状況の把握とその改善、教師の学習指導の把握とその改善、各学校の指導計画の把握とその改善という三つを、評価の目的とする。このことから、キャリア教育の評価では、生徒の学習状況に関する評価、教師の学習指導に関する評価、各学校の指導計画に関する評価という三つの評価を、その対象とする。

2 生徒の学習状況の評価

キャリア教育における生徒の学習状況の評価は、生徒がこの時間の目標について、どの程度達成したのかという状況を把握し、よりよく学習を進め、育成する資質・能力が確実に育まれるように学習を導くために行う。ここでは、生徒の学習状況についてある一定の望まれる姿を想定し、それと生徒の学習状況とを合わせて考え、この学習で育成する資質・能力が適切に育まれているのかを、生徒の学習状況から丁寧に見取ることが適当である。また、観点は適切に設定するが、さらに積極的にこの観点到応じた評価規準を設定する方法もある。その際、キャリア教育の視点から観点や評価規準を設定し、評価していくことにより、教科・科目等の本質としての目標をよりよく豊かに達成していくことが重要になる。

一般的に、観点とは、各学校で設定した生徒に育成する資質・能力の幾つかの要素を簡潔な言葉で示したものである。また、評価規準とは、この観点をより具体的に生徒の学習活動において育まれている姿として表したものである。キャリア教育における生徒の学習状況の評価では、各学校で育成する資質・能力の明確化を図って目標や内容を定めることから、その目標に従って評価の観点を適切に定め、確実に育成する資質・能力が育まれるように評価規準を設定することが望まれる。

キャリア教育における具体的な生徒の学習状況の評価の方法では、以下のように、信頼される評価の方法であること、また、多様な評価の方法であること、そして、学習の過程を評価する方法であることが重要である。

まず、信頼される評価の方法としては、生徒の学習状況を評価する教師の適切な判断に基づいた評価が必要であり、おおよそどの教師も同じように判断できる評価が求められる。例えば、あらかじめ指導する教師間において授業の目標に従った観点を確認しておき、これに基づいて生徒の学習状況を評価することなどが考えられる。この場合には、単元において定められた評価の観点のすべてを一単位時間の授業において評価するものではなく、単元において定められた観点のうち、一単位時間で育むべき幾つかの観点だけについて評価することが適当である。

次に、多様な評価の方法としては、生徒の発表や話し合いの様子、学習や活動の状況などの観察による評価、生徒のレポート、ワークシート、ノート、作文、絵などの製作物による評価、生徒の学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集積した「キャリア・パスポート」、評価カードなどによる生徒の自己評価や相互評価、教師や地域の人々等の記録による他者評価がある。なお、これらの多様な評価は、適切に組み合わせられて評価されることが考えられる。また、この際には、教師間や教師と生徒の間で共通に理解され共有されている観点に基づいて評価することが大切である。

また、キャリア教育では、その生徒の内に個人として育まれているよい点や進歩の状況などを積極的に評価する個人内評価や、それを通して生徒自身も自分のよい点や進歩の状況などに気付くようにすることも肝要である。

このようなキャリア教育における生徒の学習状況の評価の方法は、生徒の内にある資質・能力を的確に捉え、見定め、かつ、それをよりよく育む教師の学習指導に直接的に役立つ評価の方法として常に意識することも重要である。

3 教師の学習指導の評価

キャリア教育における教師の学習指導の評価は、この授業における教師の学習指導について、生徒に育成する力がどのように育まれているのかを生徒の姿を通して評価することにより、その学習指導の問題を探り、改善することを目的としている。

ここでは、まず、教師の学習指導の要諦として、なによりも教師のあたたかい生徒理解を基本することを確認しておきたい。すなわち、キャリア教育では生徒一人一人の興味・関心は個別なものであり、それぞれに独特である。また、体験活動などにより見出され、設定される問題もまた個々の生徒によって異なるものが多いものである。さらに、活動に要する時間も問題によって違い、そのための教材も固有なものになることが多い。これらの生徒の姿は、その生徒が有している、その生徒なりのよさや可能性を現しているものである。

したがって、キャリア教育における学習活動では、常に生徒の側に立ち、寄り添い、生徒の気持ちや考えを尊重し、それを汲み取った学習指導を心掛けることが必要である。

具体的な教師の学習指導の評価の観点について例示する。

基本的な評価の観点(例)

- ① 目標の設定について
 - ・ 目標の設定は具体的で妥当であったか
- ② 活動中の評価について
 - ・ 生徒は積極的に取り組んでいるか、理解はどうか
 - ・ 期待した変化や効果の兆しはあるか
- ③ 生徒の変化の評価
 - ・ 活動中の生徒の態度の変化
 - ・ 目標の達成状況(実施過程中、および終了時)
 - ・ 特に顕著な生徒の資質・能力、課題など

教師の学習指導の評価では、まず、教師自らが日常の授業の反省的な態度により、日々の授業を振り返り、授業を捉えなおすことをその基本としたい。その場合、例えば授業の目標が明確であるか、指導の内容が生徒の発達段階に合っているか、学習の形態が効果的に組み合わせられているか、問題解決や体験的な活動として充実しているか、外部人材や地域・文化の活用が学習指導に効果的かなど、キャリア教育において目指す資質・能力が確実に育まれるように具体的な学習指導の実際を示して、各過程に適切に位置付けて評価することも考えられる。

また、生徒のポートフォリオや自己評価・相互評価などをもとにして、教師の学習指導の基になっている生徒理解や生徒の実態把握、学習過程における生徒の活動の深まり方や意欲などについて、授業での具体的な教師の学習指導の実践場面を検討することも考えられる。具体的な教師の学習指導の評価の方法としては、例えば、複数の授業評価項目を設定し評価する評価尺度法、教師と生徒の発言内容を記述する文章記述法、録音や映像による記録法等の評価の方法を工夫することである。

なお、キャリア教育における教師の学習指導の評価では、先に述べたように、よりよく生徒を育もうとするあたたかい生徒理解と、それを基にした生徒の学習活動を意味付ける深く丁寧な見取りを常に心掛けることは重要である。また、このあたたかい生徒理解と丁寧な見取りについては、キャリア教育で学習指導をした教師相互に、あるいは学習指導に協力してくれた地域の人々などとともに語り合うことも、この時間の学習指導の評価では極めて重要である。

4 各学校の指導計画の評価

各学校においては、キャリア教育の目標の達成を目指した指導計画が、効果的に実現する働きをしているのかを適切に評価し、その改善を図ることが必要である。

キャリア教育における指導計画の評価では、その前提として次のような点が考えられる。

- ・キャリア教育の目指す目標が、具体的で明確であること
- ・目標が各学校や生徒の実態に応じて、実行可能な内容であること
- ・教師がキャリア教育の意義と実践への計画、方法等を十分理解できていること
- ・教育活動の実行に際し、生徒にどのような変化や効果が期待されるか等が、具体的に示されていること
- ・評価方法等が適切に示されていること
- ・教師が、評価の目的、方法等について理解し、適切に評価できる能力を有すること
- ・キャリア教育の推進体制が確立されていることなど

具体的な評価の方法としては、年間計画の中に評価の時期を適切に位置付け、できるだけ客観的な評価となるように、多面的かつ継続的な評価を実施することが重要である。

例えば、単元実施の終了時に生徒の学習状況と指導計画について振り返り、計画と授業の実際との相違点を記録として残したり、単元での生徒の自己評価やポートフォリオにおける特徴的なエピソードをまとめたり、更に、生徒や保護者、事業所の方にアンケート調査を実施したりするなど、学期末や学年末のみならず、平素から各単元の具体的な改善に生きる評価を心掛けた方法を工夫すべきである。

なお、キャリア教育を進めていくためには、各学校が創意工夫をこらして、実践していくことが大切であるが、その際、自校の取組や校内研修の在り方等について「チェックシート」を作成し点検してい

第2章 キャリア教育推進のために

くことも大切である。次の表はその「簡易チェックシート(例)」として参考とされたい。

【学校におけるキャリア教育推進チェックシート(例)】

観点	評価項目	チェック
教育活動	自校のキャリア教育の目標の具現化を図る全体計画が作成されている	
	キャリア教育を教育活動全体で行っている	
	学年ごとに育成する資質・能力が明確化された年間指導計画が作成されている	
	生徒の問題解決的な活動や体験的な学習の時間が十分に確保されている	
	課題が見いだせない生徒に対して、教師が課題の例を示したり、複数の課題の中から選択させたりする等の適切な支援を行っている	
	課題の追究方法を生徒が理解できるように見通しや振り返りの場面や交流の場面を設けている	
	学習のまとめの段階で、学習の成果を発信できるまとめ方や発信の方法を工夫させている	
	評価計画をつくり、各段階で効果的に評価し、指導等の改善を行っている	
教育条件整備	保護者や地域の協力機関とのネットワークづくりができています	
	教職員全体が自校のキャリア教育のねらいや内容について共通理解している	
	教師の学習のねらいや児童の実態等、視点を明確にして、社会人講師や地域の人材との事前の打ち合わせを行っている	
	キャリア教育を推進する上で必要な施設・設備や予算措置は十分である	
	校内にキャリア教育推進委員会等を設置し、定期的に話し合いが行われている	
	キャリア教育に関する校内研修を計画し、実施している	
	キャリア教育の実践の計画・実施・評価に関して、校内や学年内で積極的な話し合いが行われている	
	評価結果に基づき、指導等の改善を図っている	

(参考)国立教育政策研究所「子供たちの『見取り』と教育活動の『点検』～キャリア教育を一步進める評価～」についてはこちらのQR CORDから

https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/career-report_pamphlet2.htm



(コラム) このような連携・協働も……

島根県教育委員会では「キャリア・パスポート」でも家庭・地域と連携・協働を進めている。令和2年に「キャリア・パスポート」の取り扱いについて保護者、地域住民に周知した資料には、コメントの書き方まで丁寧に解説されている。

**令和2年度から全国すべての
小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等で
「キャリア・パスポート」が始まります!**

12年間の記録を蓄積します

- これまでに学んだことを振り返って、まとめなおしたり、残す記録を選んだりします。
 - ※例えばこんな記録を残します
 - ・1年間の自分の学びを振り返って、学んだことについてまとめた記録
 - ・「今、夢中になっているもの」や「将来の夢」など、自分自身について書いた記録
 - ・家庭や地域での学びも含めて、自分がぜひ残しておきたいと思った記録
- 苦労したことや、失敗したことを含めて、ありのままの自分を残していくことで、自分が何を学んできたのか、何を大切にしてきたのか見えてくるでしょう。その様な記録が残っていることで、自己理解が深まり、これからの生き方を考えていくための貴重な手掛かりとなるはずですよ。

保護者の皆さま、地域の皆さまへ

子どもたちはこれまでの学びを振り返り、自らの成長を実感します。その際に、保護者の方や地域の方など、他者から言葉をかけてもらうことが、自己理解を深めたり、自己有用感を高めたりすることに有効です。学校から保護者の方や地域の方にコメントを求めることもあるかもしれませんが、子どもたちにとって、皆さんのあたたかい言葉や励ましはいつになってもうれしいものですので、その際はご協力ください。

子どもたちは、これまでの学びを振り返ることで、自分の成長を実感します。この様な記録は、自分が何を大切にできたのかを知る手掛かりとしてとても有効です。

子どもが記入しないことも考えられます。そのような場合でも、無理矢理書かせるのではなく、寄り添ってコメントすることで、子どもの気付きが促されます。